【第四三回大会シンポジウム　危機言語の口承文芸】

「沖縄・奄美・アイヌの伝承と記録」に参加して

熊野谷　葉子

シンポジウムの方向性

第四三回大会シンポジウムは、口承文芸がどのように伝承され、記録され、そしてアーカイブ化されているかについて、沖縄・奄美・アイヌそれぞれの現状を踏まえた議論をするという企画だった。筆者が本シンポジウムのコメンテーターを任されたのも二〇一七年の第四一回大会でシンポジウム「口承文芸デジタルアーカイブの課題と展望」を立ち上げ、問題提起報告を行った経験があったからである。その大会から二年を経て、本シンポジウムでは様々な地域や集団、採録者の立場によるアーカイブの目的や現状の違いが議論され、アーカイブ構築という点で二〇一七年と連続性のあるものになることが予想された。

しかし最終的には、シンポジウムの正題は「危機言語の口承文芸」となり、副題「沖縄・奄美・アイヌの伝承と記録」が付された。アーカイブという概念は、副題の「記録」の中に圧縮されたことになる。当日の来場者を見ても、大半の関心が、「危機言語」であるアイヌ語、奄美のシマ言葉、琉球語およびその口承文芸の伝承が現在どのように行われているのか、という点にあるのは明らかだった。二〇一七年のシンポジウムとの連続性はほぼ失われ、無理にそれを打ち出しても「危機言語と口承文芸」で盛り上がるであろう議論に水を差すだけ、ということになりかねなかった。

だが、そもそもテーマが「危機言語」なのであれば筆者がコメンテーターである意味はない。筆者の専門はロシア・フォークロア、ロシア語はロシア連邦の国民だけでも一億四〇〇〇万人が話す世界でも大規模な言語であり、国内の少数民族の言語を何だかんだと抑圧して危機状態に追いやった側である。かくして筆者は大きな顔をして前に座ったものの、冷汗をかきながら各報告を必死で追っていた。いったい私に何のコメントができるのか。いやそれどころか、弾圧者の側からコメントしろと言われたらどうしようか……。

登壇された三名の報告はいずれも非常に興味深く意義あるものだった。以下はそれを受けて私が行ったコメントをまとめたものであるが、牽強付会のそしりは免れない。フロアからの質問もそれぞれの報告内容に関する個別的なものにとどまり、全体が焦点のしぼられた議論に発展するということがなかったのが惜しまれる。こうした方向性の不一致については、大会運営

委員の一人であった自らの責任を痛感しつつ今後の教訓としたい。

危機言語の口承文芸の記録と伝承

報告者に共通したテーマは、その言語の母語話者はほとんどいないが言語と口承文芸を伝承したいという意志を持つ人がいる状況で、過去に記録された口承文芸をいかに後代に伝えるか、ということであったかと思う。

遠藤志保氏の「アイヌ語・アイヌ口承文芸資料アーカイブの現状」では、まず「危機言語」としてのアイヌ語の状況が説明され、母語話者がほとんどいない現在、過去に採録された口承文芸資料がアイヌ語学習の素材として使われている状況が報告された。公刊・公開されている資料は、教材としての側面が重視されるため、音声資料と聞き起こしテキストが同時に参照できるようになっているものが多い。示された実例を見ても学習者の利便をはかる工夫が施されていることが分かった。また、アーカイブを作成し公開する過程そのものがアイヌ語の学習になっているという話は興味深かった。

二〇一七年のシンポジウムでは白老アイヌ民族博物館がホームページ上に公開しているアイヌ語と口承文芸のページについて安田益穂氏が詳しく紹介したが、今回はより範囲を広げ、同様のアーカイブ作成と公開の試みが各機関で行われている状況が報告された。一方で、教材・資料として整理され公開されているもの以外に各機関や個人には相当量の口承文芸資料があるはずとのことで、それらの所蔵先別一覧の必要性も感じられた。おそらく、過去の記録資料の中には著作権の関係から、または語り手の遺族の意向から公開できないものもあるだろう。テキストの状態や内容が教材には適さないものも多いに違いない。これら公開される見込みのない資料も含め、全体として何がどこにどういった形で保管されているかが索引化され、テキストが公開されないまでも希望者にはアクセスが可能な共通アーカイブが作成される必要があるのではないだろうか。

酒井正子氏の報告では、戦後のシマ言葉禁止教育の中で奄美方言の話者が減少する中、その次の世代、すなわち一九八〇年代以降に生まれ共通語で育った若い世代が島唄を歌う状況が報告された。学校教育や地域社会の中で島唄を通じて郷土の言葉と文化を学ぼうという傾向は、口承文芸が言語学習の「教材」となっている点でアイヌ語と共通する。

一方で、島唄は即興的な要素が多くその時々の暮らしや問題を歌詞に織り込むジャンルであるため、既存のテキストを暗唱するだけではなく新しいものを作る必要がある。そのことを歌い手が認識し努力しているのが、島唄運動の特徴であろう。共通語で育った歌い手たちは、伝えられた島唄を聴き、学ぶことでシマ言葉を操る能力を養い、島唄を歌い合う「歌あすび」の場を確保されることで島唄の型とシマ言葉を使って新しい唄を

作る。そしてそれを発表し聴きあう舞台で唄の世界を広げていく。その好循環が生まれることでシマ言葉と島唄はいずれも復興し発展する、ということであろうかと思う。

島唄の例には口承文芸の伝承の本質が現れている。書かれたものを暗記しそのまま語るのは口承文芸ではない。口承文芸には、伝えようとするストーリーをジャンル特有の韻律や節まわしに乗せるテクニックが必要である。そのテクニックはその言語で話し、考え、また多くの語りを聴いてそれを語りなおす経験によって徐々に形成されるものだ。研究者としてできることは、過去の多くの資料を提供すること、語りのテクニックの形成を理論的に、経験的に支えることであろうか。島唄の生きた伝承とシマ言葉の復興が同時に展開することに期待したい。

西岡敏氏の「口承文芸のテキストと文法注釈」は、琉球語の口承文芸をどのように表記し注釈をつけるかという問題に関する、歴史的な推移を含めた詳細な解説であった。縦書きと横書き、仮名表記と漢字仮名混じり表記と音声表記、一つ一つ具体例を示しながら利点と欠点を指摘された報告は、口承文芸をいかに文字化するかという、会員の多くが共通して抱える問題に正面から取り組んだものである。

危機言語のみならず、口承文芸の文字化は困難と矛盾に満ちている。そもそも、音を再現できることを重視するのか、意味や読みやすさを重視してその言語の正書法にのっとって記述するのかを選択しなければならない。音声資料の公刊が容易になるにつれ後者が増え、例えば九〇年代から逐次刊行されているロシアの叙事詩全集なども、最初の方の巻には音声表記によるテキストの付録があったが後にはなくなりＣＤが添付された。音か分かりやすさかという問題は、今後は過去の記録の文献学的な分析において重要であり続けるだろう。

西岡氏の報告では、テキストの文字化に際しての聞き取りと解釈の問題もあらためて確認された。文の区切り、分かち書きなどの一見なんでもないように見える作業にも研究者による解釈の違いや方言差が反映しており、口承文芸の記述には言語学の知識と方法が欠かせない。他方、口承文芸を教材としてその言語を学ぼうという場合には分かりやすい文法説明と統一された表記が必要だろう。記録し保管するテキストには学問的に厳密な表記と細かい注釈が必要だが、一般に公開し広く親しまれ学ばれることが目的の教材には、統一した表記による分かりやすい文法注釈が必要とされるのではないだろうか。

こうして振り返ると、冒頭で述べたように本シンポジウムの方向性は企画段階とはだいぶずれていたとは言え、結果的には、口承文芸の記録と保管に関する様々な視点からの相互補完的な事例交換の場となり、参加者は多くの知見を得た。と同時に危機言語に共通して見られる問題点や取組みも明らかになった。その上で多数の話者がいる言語を見直してみると、そこでは言語は活発に使われていても口承文芸が「危機」または消滅した

状況にあることが思い出される。むしろ危機感のなさから口承文芸の記録と保管、公開と利用の推進への取り組みが緩慢になっているのではないだろうか。島唄の報告にあったように、口承文芸は本来「場」と結びついて発展し継承されるものであり、場の喪失は新しいテキストの産出中止を意味している。それを明確に意識して口承文芸の記述と継承、場の創造に真摯に取り組む危機言語関係者の態度は、座しているうちに口承文芸を失っている多数派言語の保持者および研究者こそが学ぶべきものであろう。

（くまのや・ようこ／慶應義塾大学）

口承文芸関連図書一覧1

二〇一八年～二〇一九年九月を中心に

『熊民叢書13　下須島～天草市牛深・下須島の民俗～』二〇一八年三月／熊本大学文学部総合人間学科民俗学研究室／非売品

立石憲利著『つやまの民話　新修津山市史別巻』二〇一八年六月／津山市／二〇〇〇円

石井正己編『菅江真澄が見た日本』二〇一八年六月／三弥井書店／二七〇〇円

石井正己著『菅江真澄と内田武志 歩けぬ採訪者の探究』二〇一八年八月／勉誠出版／三〇〇〇円

丹菊逸治著『アイヌ叙景詩鑑賞 押韻法を中心に（アイヌ・先住民族言語アーカイヴプロジェクト報告書二〇一八』二〇一八年八月／北海道大学アイヌ・先住民研究センター／非売品

赤嶺政信著『キジムナー考 木の精が家の神になる（がじゅまるブックス）』二〇一八年八月／榕樹書林／一〇〇〇円

永野美智子著『秦の昔話』二〇一八年九月／リーブル出版／一五〇〇円

小澤俊夫著『日本を見つめる』二〇一八年九月／小澤昔ばなし研究所／一八〇〇円

延恩株著『韓国と日本の建国神話 太陽の神と空の神』二〇一八年十月／論創社／二四〇〇円

ヘルダー編、嶋田洋一郎訳『ヘルダー民謡集』二〇一八年十月／九州大学出版会／一〇〇〇〇円

平川祐弘著『平川祐弘決定版著作集 第1期第12巻 小泉八雲と神々の世界』二〇一八年十月／勉誠出版／一〇〇〇〇円

小澤俊夫著『ときを紡ぐ 昔話をもとめて 下』二〇一八年十一月／小澤昔ばなし研究所／一八〇〇円

藤井貞和著『非戦へ物語平和論』二〇一八年十一月／水平線／一八〇〇円

東京子ども図書館編『おはなしのろうそく32』二〇一八年十一月／東京子ども図書館／五〇〇円

佐藤慎司・村田晶子編著『人類学・社会学的視点からみた過去、現在、未来のことばの教育 言語と言語教育イデオロギー』二〇一八年十一月／三元社／三三〇〇円

高田充也著『北アルプスの民話』二〇一八年十二月／ほおずき書籍／一五〇〇円

二本松康宏編『諏訪信仰の歴史と伝承』二〇一九年一月／三弥井書店／二八〇〇円

瀧音能之著『風土記と古代の神々 もうひとつの日本神話』二〇一九年一月／平凡社／二四〇〇円

二九六頁ページに続く